

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

①分野名 : 家畜飼育		②事業名: 山羊飼育普及事業(山羊銀行)		⑦投入資金(Rp.)	
③開始時期: 1999 年度前半～継続中				1997:	
④対象集落: Tompo 村 Pelleng mallimpo 集落				1998:	
⑤対象者 : 女性グループ 25 名				1999: 5.252.000	
				Total 5.252.000	
⑥実施協力機関: 将来的に DINAS Peternakan。現在は隊員チーム独立実施。					
⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて):					
<ul style="list-style-type: none"> ・山羊飼育普及による身近な収入源増加 (a) ・女性の経済活動、集団活動の活性化 (b) 					
⑨事業開始までの経緯:					
<ul style="list-style-type: none"> ・1997 年 4 月、前リーダー杉永氏と、前家畜飼育隊員和田氏により、現地NGOがジョクジャカルタで手がけている山羊銀行の視察が行われた。 ・市場調査隊員による山羊流通調査。(山羊購入にあたり、山羊価格相場、山羊市場の動向を家畜飼育隊員からお願いした。) ・家畜として牛を飼育している農民がおり、飼料も手に入りやすい環境であるが、山羊を飼育している農民はあまり見られない。 ・市場が立つ日以外は女性達は家にいるようである。女性達の活動として養蚕が行われているが、日常の仕事ではない。 ・この集落は生活用水事業が行われた場所でもあり、事業の導入がスムーズに行くのではないかも考えられた。ここに目をつけて山羊飼育の話を集落長にしたところ、女性の希望者が多く集まり、活動を始めることとなった。対象者は集落長とイمامをお願いした。活動内容はチャミン集落と同じである。 					
⑩方法: 投入と特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図					
投入:		投入についての説明:			
1999 年 豆山羊 オス 1 頭、メス 4 頭/グループ		4 名/グループ。 1 小屋/グループ メス山羊: 1 人 1 頭飼育 オス山羊: グループ内持ちまわり飼育			
特記点:		意図:			
<ul style="list-style-type: none"> ・女性グループへの貸し出し。 ・2 年後に返却、Waiting Group へ再貸し出し ・飼育日誌の記録 ・定期集会開催(1ヶ月に1回) 		<ul style="list-style-type: none"> ・女性の経済活動・集団活動の活性化 ・事業の自立的持続、普及効果 ・所有意識の強化。飼育技術促進。 ・集団活動の活性化。飼育技術の指導。 			

<p>⑪これまでの進歩状況と成果:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象者である女性の活動が活発である。「自分の担当山羊」という姿勢がちゃんと表れている。 ・仔が生まれたグループもあり、注意をはらって飼育している姿がみられる。 ・山羊購入を同集落内の家畜商人を通して行ったところ、メンバーと商人の間で情報交換がなされ、グループが本当に気に入った山羊を選ぶことができ、このことがメンバーひとりひとりに「自分の担当山羊」として認識させることにつながったのではないだろうか。 ・集会にも積極的に参加している。
<p>⑫現状・問題点(反省を含む):</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼育日誌の記入について理解はあるようだが、読み書きのできるメンバーが少なく、記入が継続しないグループもある。記入ではなく絵や記号にする等の工夫が必要であると思われる。
<p>⑬解決方法・バルー県におけるフォローアップへの提言:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ
<p>⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ
<p>⑮事業をやる上での該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響(セミナー発表内容じゃないです)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループメンバーである女性達が大変積極的に飼育を行っている。他集落のように男性任せにしているところは見られない。 ・この集落に山羊が導入されるのは初めてであり、山羊飼育への興味もあるようだ。 ・集会において、メンバーからの質問、意見がよく出ている。
<p>⑯その他:</p>

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

①分野名 : 食用作物		②事業名: 落花生優良種子普及事業	⑦投入資金(Rp.)
③開始時期: 1997年度開始～1998年度終了 (2年間)			1997:
④対象集落: 6集落(Pange, Palakka, Kaerange, Camming, Genne, Allejjang)			1998:
⑤対象者 : 農家			1999:
			Total _____
⑥実施協力機関: パル県作物事務所(実際には全く協力を得る事はできなかった。)			
⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): ・増収が期待できる優良品種に切り替える事による収入増加 ・優良種子の導入によって作付け失敗を回避。			
⑨事業開始までの経緯: ・パル県では落花生の種子の更新が長い間行なわれていない、そのため在来種では増収が望めなくなっている、とパル県作物事務所所長の話。(日本では品種の更新は希で、千葉などの産地では何十年と同一品種を使用している。)この話がもとで事業が開始された。 ・どのようにして対象集落、対象者が選ばれたのかを説明。 ・PPLが対象集落及び対象者を決定した。			
⑩方法について特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図			
投入: 優良種子 1997年 150kg(原原種農場) 1.4t(協力隊管理下で生産) 1998年 200kg(原原種農場)		意図: ・優良種子の増殖 ・ ・ ・	
特記点: ・農家に対し貸し付け種子は、収穫後に同量返還してもらい、その種子を他の農家に配る事により優良種子の普及に努める。			
⑪これまでの成果: まるでない。			
⑫現状・問題点(反省を含む): 優良種子を生産するだけの技術と意識がプロジェクト参加農家になく、県作物事務所もこの事業に対して協力的ではなかった。現状としては、投入した種子は在来種に混ざってしまい、PPWT内に優良種子は一粒も無い。優良種子を普及させるには、それなりの設備(例:原原種農場・原種農場)が必要で現在のパル県の現状ではこの計画を推し進めるのは難しい。			
⑬解決方法・パル県におけるフォローアップへの提言: 本事業の草案部分で既に誤りがある。在来種の収量が低いと言うがある地域では日本の水準をこえており(データとして信用性が低い)、品種の更新の必要性を感じない。事前調査の徹底を提言したい。			
⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア: 普及事業を行なうにはインパクトが一番大切で、“収量に格段の差がある”“新種の作物である”と言った要素が無ければ、普及を推し進めるのは難しい。さらに普及と言うのは地道な活動が大切で、よく住民と対話する機会を持ち、住民の意識改革を最も大切な事項と認識することである。			
⑮備考: 今日の格言 普及の道は1日にしてならず。			

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

①分野名 : 食用作物		②事業名: 農家研修(ポゴール)		⑦投入資金(Rp.)	
③開始時期: 1996年1月, 9月(計2回)				1997:	
④対象集落: Desa Tompo, Galung, Palakka, Anabanua, Liburen, Harapan				1998:	
⑤対象者 : 自営農家、作物事務所普及員(PPL)				1999:	
				Total	
⑥実施協力機関: バル県作物事務所、ポゴール研修所 (Karnya Nyatta)					
⑧目的 : 先進農業の体験学習による参加農家の営農意識の向上と農業基礎知識・技術の向上					
⑨事業開始までの経緯: ・各集落長に研修候補者を選出してもらい、作物事務所所員・FCP・隊員共同で研修参加者を選考 ・					
⑩方法について特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図					
投入: 1996年1月 農家7名・職員8名 9月 農家23名・普及員(PPL)1名 FCP1名			説明:		
特記点: ・ ・			意図: ・ ・ ・ ・		
⑪これまでの成果: ・農家の農業知識の向上。 ・PPWT内の篤農家の発掘。プロジェクト初期段階において、食用作物分野の事業に参加できる篤農家を発掘した事はかなり大きな成果といえる。					
⑫現状・問題点(反省を含む): ・短い研修期間内に養殖・養鶏・園芸と多分野にわたって学んだためか、どの分野も広く浅くしか学べなかった。そのため、しっかりした技術が身についておらず、研修後その成果を圃場で見るのは難しい。 ・研修参加候補者を集落長に選出してもらったため、候補者が集落長の家族にかたよった。					

⑬解決方法・ハル県におけるフォローアップへの提言:

・プロジェクト初期段階に篤農家の発掘という意味では、この研修事業はある程度意味があったと思われる。が、各参加者の農業技術・知識が向上し自分の圃場で研修成果を存分に発揮しているとは思えない。その理由として二つの問題点があげられる。一つ目は、研修内容(カリキュラム等)に問題があったという事だろう。短い期間に多分野にわたり研修したため広く浅くしか学べなかった。そのため技術が身につかず成果を圃場で発揮するに至らない。二つ目は、これが一番の問題で、参加者にしっかりとした研修参加の目的・動機があったか?または与えたか?ということである。目的・動機を持たない参加者は研修の意味を理解する事はなく、研修自体にも身が入らない。候補者選出・選考段階において参加者に対し明確な動機づけを行ない、研修後のビジョンを明確に見せる必要がある(研修後にフォローアップ事業があるなしに関わらず)。しっかりとした目的・動機があれば研修内容が少々稚拙であっても得るものは大きくなる。研修事業において上記の問題点を解決してから実行に移す事を提言したい。

⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

⑮備考:今日の格言 “人間すべての行動・思考は動機づけられる。”

“動機を持とうとしない人間は、かかすと変わらない。”

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

①分野名 : 食用作物	②事業名: 農家研修(Nganjuk)	⑦投入資金(Rp.)
③開始時期: 1997年6月		1997: 1998: 1999: Total
④対象集落: Desa Tompo, Galung, Liburen, Harapan		
⑤対象者 : 農家・県作物事務所所員		
⑥実施協力機関: 県作物事務所・Nganjuk 研修所(BLPP - Nanjuk)		
⑧目的: ・アカワケギ栽培技術の修得		
⑨事業開始までの経緯: ・県作物事務所が水田裏作としてアカワケギ栽培に力を入れているが、所員・農家ともにBM栽培に通じていない。BM栽培を推し進めるためには、研修を行ない農家・所員共に技術・知識を向上させる必要があった。 ・研修対象者は所員と隊員とで決定した。		
⑩方法について特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図		
投入: 研修参加者 所員 5名・農家 9名 FCP 1名		説明: 研修後のフォローアップを考えて、所員・FCPが研修に参加。
特記点: ・研修科目がアカワケギのみ ・研修実行はJICA、研修後のフォローアップは県作物事務所		意図: ・目的を持った研修の実施 ・フォローアップをイ側が行なう事で栽培普及継続的に行われる(予定だった)。
⑪これまでの成果: ・アカワケギ栽培技術の修得。 ・研修参加者のなかにBM栽培に成功している人もいる。		
⑫現状・問題点(反省を含む): ・県作物事務所による研修後のフォローアップが、全参加者に及んでいない。 ・		

⑬解決方法・バルーン県におけるフォローアップへの提言:

・本研修は、研修前に参加者に目的と動機を持たせる事はされていないが、研修内容を1つに絞れた事で自然と目的を持つ事が出来た。が、研修後フォローアップの入らなかった地域では、参加者は目的を失ってしまっている。“自助努力が足りない”という言葉でうやむやにされがちなのだが、漠然とついた目的や動機ではその後の自助努力は難しい。自助努力を付けさせようとするなら、やはり研修前・研修後に継続して目的と動機を与えるような活動が必要である。しかし、それは種子を与え栽培機会を作りさえすれば良いという安直なものであってはならない。物の投入のみでは目的・動機が明確にされず、果てには失う事にもなる。物の投入よりも意識改革(目的・動機づけ)に力を入れるべきだ。物の投入は、目的・動機が固まってから行なった方が良くであろう。研修・その後のフォローアップ事業について上記の事を提言したい。

⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

⑮備考:今日の格言 “意識改革なくして普及は在らず”

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

①分野名 : 食用作物	②事業名: BM 栽培普及事業+農家研修(Nganjuk)	⑦投入資金(Rp.)
③開始時期: 1999年5月~		1997:
④対象集落: Desa Palakka Dusun Cenne, Kaerange, Desa Anabanua Dusun Allejjang		1998:
⑤対象者 : 農家・育苗所所員		1999:
		Total
⑥実施協力機関: 県作物事務所・Nganjuk 研修所(BLPP - Nanjuk)		
⑧目的 : ・研修により BM 栽培技術の修得。 ・栽培グループを組織する事により円滑な普及をはかる。		
⑨事業開始までの経緯 : ・1997年に行われた BM 栽培普及事業は、研修後のフォローアップ事業(作物事務所が展開中)が一部の地域に限定されて行われており、BM 研修者資源が有効に使われていない。これは、“研修は JICA、フォローアップは県事務所”といった分業が BM 栽培普及事業に一貫性を無くさせ、効率的に行われていない、という理由からきている。そういった現状の中、今回の事業は研修から栽培収穫までの一貫した事業を展開し、研修一普及事業のモデル作りにするつもりでいる。 ・対象者は隊員と篤農家とで決定した。		
⑩方法について特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図		
投入:(研修) ・農家 6名・育苗所所員 1名・隊員 1名 (普及事業) ・農家 31名(栽培グループ) ・BM 種子 1.3t・肥料・農薬・その他資材等	説明: ・隊員の研修全過程参加により、研修生の負担の軽減し研修に打ち込みやすい環境を整える(例:食事・生活に関する研修所改善をリアルタイムで行なえる)。 ・研修後の技術普及が円滑に行なわれるよう栽培グループを組織。 ・栽培に必要な資材を整え、円滑に栽培を進める。	
特記点: ・隊員自ら研修に参加 ・研修前に栽培グループを作成 ・研修後、作付け計画表作成 ・	意図: ・研修中、常に参加者に接し意識向上を促す。 ・研修参加者をグループの代表者として参加させる事により、一種の使命感を帯び研修参加の目的・動機付けになる。 ・非研修者の作付け手順に対する理解を助ける。研修者の作付け手順に対する整理。 ・ ・	

<p>⑪これまでの成果:</p> <ul style="list-style-type: none">・研修は無事終了。現在、研修者が核となり BM を栽培中(1999. 8. 28)。
<p>⑫現状・問題点(反省を含む):</p> <ul style="list-style-type: none">・研修前に栽培グループを組織する事により、研修参加の目的と動機がはっきりして研修参加者は明確な目的・動機を持つ事が出来た。が、グループの非研修者は動機付けがいまいち曖昧で、BM 栽培に対しても明確なビジョンが持っていない。その結果、栽培に対し情熱を感じられない人がいる。また、栽培に対して情熱は在るものの、目的・動機・ビジョンがないため率先して栽培に参加する姿勢の無い人もいる。今後は栽培グループが真のグループになるよう全員の目的・動機付けに力を入れていきたい。 (例：グループメンバーによる南スラウェシ州内の BM 栽培先進地視察、等)
<p>⑬解決方法・ハル県におけるフォローアップへの提言:</p> <ul style="list-style-type: none">・現時点ではまだ提言できる事は少ない。今後期待されたい。
<p>⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:</p>
<p>⑮備考：今日の格言 “分業は、Kerjasama ではない。”</p>

分野:野菜	事業:トウガラシ栽培	投入資金(Rp.×1,000)
開始時期:1998年度後半<12月>(1年目)		1998:1,200
対象集落:カレンゲ集落(初回)、ガルン集落(2回目)		1999:4,000
対象者:やる気のある農民		
実施協力機関:なし		
<p>目的: *栽培から販売までを試験的に行い、可能性、問題点を探る。</p> <p>*販売経路の開拓。</p> <p>*リーダーになれる人材の育成。</p> <p>*栽培技術、知識の向上。</p> <p>*この試験栽培に成功すれば、今回の対象者を中心とし栽培面積の拡大を図り、産地形成を目指す。</p>		
方法:投入と特記点とその意図		
投入:	投入についての説明:	
1998年度 資材準備	1998年にロータリー耕のトラクターが二台はいる。	
1999年度 栽培(2月～、6月～)	主な資材は種子、肥料、農薬、支柱など。	
特記点:	意図:	
初回はカレンゲ集落でダマール氏と共に2月から栽培を開始した(10a,1000本)。通常の栽培と共に、試験的に黒ビニールシートを用いてマルチ栽培を行った。	マルチは除草効果を調べるため一部に使用したが、何のためか(遊びか?)野ブタが踏み破るため効果は低い。	
2回目はガルン集落で3名(イブラヒム、アンボタン、ハッタ、各5a,各1000本)の農民と共に6月から栽培を開始した。	2回目はトウガラシ畑を見学させ、ダマールと話をさせる予定で、ダマールの栽培が終了する前に開始した。隊員からよりも、他の農民から話を聞く方がすんなりと理解されやすい。	
<p>これまでの進捗状況と成果:</p> <p>(初回)何回か洪水に襲われたものの、順調に生育し、現在も収穫作業中である。販売先として品質の良い収穫開始時期には、単価の高いウジュンパングンのスーパーマーケットに販売し、品質が低下してきてからは、地元の市場に販売している(これまでで700kg以上、2juta以上販売済み)。</p> <p>マンツーマン指導で基礎的な栽培知識は十分に移転できた。農薬の選び方など高度なものについては、今後、冊子を作るなどして補完したい。農民も将来的な可能性を見いだしたようで、次回はグループを作り再度栽培する意気込みである。</p> <p>当初は付近の農民も、従来から行われている粗放的な栽培と同じものと思っていたようで、興味を示さなかったが、収量が全く比較にならないため(5倍以上)、ポット育苗と堆肥を用いた今回の栽培方法に興味を持ったようだ。</p> <p>(2回目)6月に育苗を開始し、7月中旬に定植した。この間、毎週一回、農業の基礎、栽培方法について講習会を開いている。完全には理解していないが、今後、冊子を作るなどして補完したい。</p>		

現状、問題点(反省を含む):

ローカルな市場、流通の情報源がないため、隊員が直に各地に出かけて値段の交渉を行っている。これに掛かる労力が大きい。また、大量に一度に販売できる大口の販売先がないため、何カ所も回って販売せざるを得ない。現在、地道に販路を作っているところである。

町に住んでいる限りは解らないが、対象村では8月から9月にかけて強風の日が続く。この風の影響が、今後、どう響いてくるか不安である。

今後の課題と解決方法、バル県におけるフォローアップへの提言:

ジャカルタやスラバヤなどの大規模な町の価格ではなく、地元の南スラウェシ各地の価格情報を得られるようなシステムがあれば、的を得た栽培計画も建てやすく、もっと順調に販売できるだろう。農民にとって栽培は可能だが、販売先、商人との交渉が問題になると予想される。少量なら直接バルの市場に販売できるが、これから栽培を普及しようとするなら、大口で大量に引き取ってもらえる販路を見つける必要がある。また、共同出荷のシステムが出来れば輸送費と手間も削減できるだろう。

他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

乾燥保存の利く小型種、クリティン種の栽培を行い、販売の負担を軽減する。

瓶入りトウガラシの加工販売が出来れば、保存の問題、品質の問題もクリアでき、販売価格が安定する。

海外への輸出までを考えた、大規模なトウガラシ栽培。中途半端な量では販売が難しいので、初めから輸出目的で栽培する。輸出業者と話をまとめ、それに合わせて栽培計画を建てる。

事業をやってきた中で言える(直面した)該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響:

カレンゲの人はJICAの活動を冷ややかな目で見ている。自分にとって実益のないことには興味を示さない。カレンゲ以外から畑を見に来た人は、作り方を教えてくれというが、カレンゲの人はだいたい苗をくれ、肥料をくれ、うちの畑に植えろと言うだけである。ただ、収穫が始まってからは、従来よりも収量が断然多いので、ダマールから話を聞いたりしていたようだ。

村に住んでいる強みで、ガルの候補者はいい人しか選んでないので、とりあえず順調です。この集落はリーダー的な人材が豊富なので、ゴトンロヨンの共同作業までは出来ないが、共同で活動を行うことは可能だろう。

その他:

分野:野菜	事業:メロン栽培	投入資金(Rp.×1,000)
開始時期:1998年度前半<4月>(2年目)		1998:1.200
対象集落:トンボ村パラン集落、ガルン村ガルン集落。		1999:3.500
対象者:農民(1998年度 10人 1999年度 2人)		
実施協力機関:食用作物事務所		
<p>目的: * 新種作物としてメロンの可能性、問題点を探ると共に、栽培、普及を行う。</p> <p>* 栽培リーダーの育成。</p> <p>* 栽培に成功すれば、今回の対象者を中心に栽培面積の拡大を図り、産地形成を目指す。</p> <p>* 市場との繋がりを作る。</p> <p>* 農民の知識、技術の向上を図る。</p>		
方法:投入と特記点とその意図		
投入:	投入についての説明:	
1998年度 栽培(4月から8月まで)	1998年にロータリー耕のトラクターが2台はいる。	
1999年度 栽培(6月から8月まで)	主な資材は種子、肥料、農薬、支柱など。	
特記点:		意図:
<p>(初回)1998年度は気象的に非常に不安定な年で、通常なら乾期になる時期でも雨が降り続き、野菜栽培には不適な気象であった。また、5月にはジャカルタで暴動が発生したために、定植直後に隊員が帰国となり十分な栽培指導が出来なかった。その為か、病気が発生し収量、品質共に低かった。収穫後のメロンは販売先が見つけれず、食用となった。一部の農民が販売のために商人を訪れたが品質が良くないため断られたようだ。</p> <p>(2回目)前年度は雨が止まないため、雨の中、栽培を強行したため作業は困難を来し、病気の発生も見られたため、1999年度は雨期が完全に終わってから、栽培を開始した。その為、計画よりも1ヶ月ほど作業開始が遅れた。現隊員の帰国までに収穫、販売できるか微妙なところである。</p>		<p>まず成功例を作り、そこから波及を狙った。</p>
<p>これまでの進捗状況と成果:</p> <p>初回は全くの失敗に終わった。対象者10名は隊員一人が見回るには負担が大きすぎた。天候が悪かったこともあるが、日本に帰国となり栽培指導できなかつたことが大きい。その為、パラン集落では農民に悪い印象を残しただろう。</p> <p>2回目は前回の教訓を生かし、対象者を2名に絞込んだ代わりに、共同で作業をしながら、細部に渡り指導をしている。週一回の講習会の効果で基礎知識も身に付いてきた。現在、果実が野球ボール大に肥大してきたため、近隣農民の興味も引いているようである。対象者2名も成功した暁には、村内で組織的に普及していきたい意向である。</p>		
<p>現状、問題点(反省を含む):</p> <p>前回の失敗から得た経験が役立っている。虫、病気の発生が予測できるので対処しやすい。</p> <p>町に住んでいる限りは解らないが、対象村では8月から9月にかけて強風の日が続く。この風の影響が、今後、どう響いてくるか不安である。</p>		

今後の課題と解決方法、バル県におけるフォローアップへの提言：

食用作物事務所の栽培計画では、事務所の人的な労働力の限界から、対象農民は少人数で各自が大規模の栽培計画しかできないだろう。しかしメロンなど、人手の掛かる作物を栽培するには、各農民一人が管理できる面積は、せいぜい5アールである。そこで、小規模多人数の栽培計画にならざるを得ない。その時の栽培指導は、どうせ職員で出来る奴はいないので、現在既に、メロン栽培経験の豊富なタネテリアジャの農民と交流させてはどうだろうか。秘密の部分もあるそうなので、その辺の調整を職員にお願いしたい。

農民にとって栽培は可能だが、販売先、商人との交渉が問題になると予想される。少量なら直接バルの市場に販売できるが、これから栽培を普及しようとするなら、大口で大量に引き取ってもらえる販路を見つける必要がある。また、共同出荷のシステムが出来れば輸送費と手間も削減できるだろう。

他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア：

全体のレベルアップを図るのに、個々に対応していたのでは時間も手間も足りない。そこで各地域のリーダーを育成することが重要となるだろう。誰がリーダーに向いているかは、長期間その地域にいて、何らかの行事の進行状況を見ていれば解ってくる。何でも独り占めしたがるリーダーもいるので注意する。まず明確な数値的目標値を、リーダー候補と決めて活動すると良いだろう。

海外への輸出までを考えた、大規模なメロン栽培。中途半端な量では販売が難しいので、初めから輸出目的で栽培する。輸出業者と話をまとめ、それに合わせて栽培計画を建てる。

事業をやってきた中で言える(直面した)該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響：

バラもガルンも見てないようで見ている。もっと話しかけてきても良さそうなものだが、遠くから見て、「キュウリか？キュウリだ。」といったは去っていく。成功例を見るまではこの態度が続くだろう。

作業している中で感じるのは、何でも子どもにやらせようとする(全員ではないが)。子どもも決まっているのなら良いが、毎回、違う子どもが来たりすると技術移転もくそもない。育苗など、ちょっとやっただけで全てを理解したつもりになり、残りは子どもに押しつける。こっちとしては、どのくらいの労力が必要なのか、どこをどう工夫すれば良くなるのかを、作業しながら考えて欲しいのだが。

その他：タネテリアジャの普及員が、メロン栽培のノウハウをかなり蓄えているらしい。が、村で講習会を開いてくれるようお願いしたら、お金を要求された。そのくらいは払うのがインドネシアのシステムといえば、そうなのだが。でも、普及員だしな。

分野:野菜	事業:メロンの雨避け栽培	投入資金(Rp.×1,000)
開始時期:1998年度後半<11月から>(1年目)		1998:1,700
対象集落:トンボ村チェンネ集落。		
対象者:疲れ知らずの農民(ムハマッド氏)		
実施協力機関:なし		
<p>目的: * 雨期用の作物として試験的にメロンを栽培する。また、屋根の効果確かめる。</p> <p>* 栽培リーダーの育成。</p> <p>* 雨期の高値を狙い販売する。また、市場との繋がりを形成する。</p> <p>* 知識、技術の向上を図る。</p>		
方法:投入と特記点とその意図		
投入: 1998年度 資材準備、育苗、雨避け作り 1999年度 栽培	投入についての説明: 1998年にロータリー耕のトラクターが二台はいる。 主な資材は種子、肥料、農薬、ビニールシート、支柱など。	
特記点: 当初はアレジャン集落とチェンネ集落の2箇所で行う予定であったが、農民の都合によりアレジャン集落は中止された。	意図: 事業対象としてJICAの事業があまり入っておらず、なおかつ、灌漑施設がなく、雨期の稲作に依存している集落を選んだ。というのも、雨期に米以上に収入の期待できる作物が栽培できれば、収入向上に繋がると考えたからである。	
<p>これまでの進捗状況と成果:</p> <p>洪水が発生するほどの、強力な雨が降り続いたにも関わらず、収穫までこぎ着けられた。ただ、品質は低く、味も良くなかったため販売には苦勞した。ただ幸運なことにウジュパンダンのスーパーマーケット、ゲラエルで引き取ってもらえた。この店長は日本人に対する印象が良いようで、その後も好意的な取引が続いている。</p> <p>最も大きな成果は農民のやる気を引き出したこと、雨期又は、イスラムの祭日を狙って作物を出荷することでより多くの収入が得られるという、栽培戦略の理解を得たことである。</p>		
<p>現状、問題点(反省を含む):</p> <p>屋根を作るための資材費も掛かり、天候が悪かったため農薬の使用量も多くなり、雨中の作業で苦勞したにも関わらず、生産物の値段は予想より低かった。その為、収支的に見て不十分であり、この方法でメロンを栽培するよりは、従来通り米を栽培した方が有利である。</p> <p>商人はスラバヤ産を高く見て、地元産を低く見る傾向があり、農民個人による販売は難しい(買いたたかれる)。少しづつ信用を築いて行くしかない。</p>		
今後の課題と解決方法、パル県におけるフォローアップへの提言:メロン栽培に同じ。		
<p>他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:</p> <p>もし、雨避け用の屋根を作るなら、大規模で完全に雨を遮断し、耐用年数の長い物を作った方がよい。今回のトンネル程度では、雨の跳ね返りが強く、病気が発生し易かった。雨避けトンネルは葉菜類、根菜類に向いている。小規模ならトウガランの雨避け栽培もできる(ムハマッド談)。</p>		
<p>事業をやってきた中で言える(直面した)該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響:</p> <p>直接隊員に話しかけてくる事はなかったが、興味深く見ていたようである。人口が少ないのか、あまり活気はないが、よくブルドーザーが大規模に造成をしている。誰がお金を持っているのやら。</p>		
その他:メロンというのは甘くもなく、高級なキュウリだと勘違いしているかも知れない。		

分野:野菜	事業:育苗所建設	投入資金(Rp.×1,000)
開始時期:1997年度後半<10月>(2年目)		1997:
対象集落:トンボ村バラ集落に建設。バル県全体を対象に活動する予定。		1998:?
対象者:バルの農民		1999:50,000??
実施協力機関:食用作物事務所		
<p>目的: * 食用作物事務所の活動拠点を村落内に築く。</p> <p>* 果樹(マンゴー、ドリアン、ランブータン)を育苗し、近隣村落に配布、普及する。</p> <p>* 新規野菜(メロン、トウガラシ等)の試験栽培、育苗、普及を行う。</p> <p>* セミナーを開催し、農民の知識、技術の向上を図る。</p> <p>* 近隣農民への情報提供の場を築く。</p>		
方法:投入と特記点とその意図		
<p>投入:</p> <p>1997年度 建設用地探し</p> <p>1998年度 整地工事、井戸掘り、備品準備</p> <p>1999年度 建物建築、給水パイプ、柵の設置、備品の準備</p>	<p>投入についての説明:</p> <p>50アールの土地を整地し、30アールの敷地を得た。</p> <p>井戸掘削後に水のないことが判明。水源から育苗所までのパイプ敷設に計画を変更した。事務所兼倉庫と堆肥小屋を建設。現在、柵とパイプを設置中。</p>	
<p>特記点:</p> <p>育苗所建設決定前に食用作物事務所、BAPPEDAと契約を交わした。内容はJICAが建物全般を建設する代わりに、インドネシア側は、土地の提供、予算的な準備、育苗所専属の職員を一名以上用意する事とした。</p> <p>建設予定地として国有地を探したが、道路沿いにある国有地は条件の悪い所にしかなかった。国有地という村長の話で、現在の場所に決定したが、建設開始と共に所有者が現れた。所有者と食用作物事務所長の間で話が付いたため、現在の場所に改めて決定した。水に関しては当時のチームリーダーの「どこでも掘れば水はでる。」という意見に従い、深井戸で対処する計画にした。</p> <p>整地工事終了後すぐに日本に帰国となったため、建物、水については一時中断となった。</p> <p>建設業者としてバルの土建屋を5社集め、説明会を開き入札を行ったが、談合があり、話の内容も信用できないため(‘なんぼでも安うできませ’という態度)、バルの業者には頼まず、整地工事と同じクジュン・ハンタンの業者に頼んだ。</p> <p>井戸を深さ150mまで掘ってみたが、水は出ず、電気的調査の結果、地下200mまで水の反応がないため、川からパイプで水を引くことに変更した。</p> <p>現場の土は石が多いと予想してはいたが、予想を遥かに超えた岩だらけであった。仕方なく山土を盛ることにした。土質については食用作物事務所長の言によりUNIHASで分析して貰い、事務所長の了解を得た。</p>	<p>意図:</p> <p>プロジェクト終了後にも、育苗所の活動が継続できるように予算と、職員の準備を約束させた。</p> <p>交通の便が、ある程度良い場所でないと思えないため、公共交通(ペテペテ)の通る道沿いで国有地を探した。この条件では候補地が見つからなかったため、道路沿いの国有地と条件を変更した。</p>	

これまでの進捗状況と成果:

広さ50アールの斜面を5段の階段状に整地し、実面積30アールの土地を得た。一番下の段に敷地面積2アールほどの事務所兼倉庫を、二段目に1アールほどの堆肥小屋を建設した。育苗用土としてカロンピ集落から、赤土を約 800,000 リットル、育苗所の2段目から4段目までに運び込んだ。排水路の敷設も終了した。残すは水源から育苗所までパイプを曳くことだが難航中である。当初の約束に従い、1998年12月頃より育苗所用の臨時職員(アリフディン)が隊員と共に活動中である。現在ランブータンの元になる苗を300本ほど育苗中である。

現状、問題点(反省を含む):

食用作物事務所の方も、この施設をどの様に活用、運営していけばいいのか明確に出来ていない。こちらから、具体的な5年後、10年後をイメージした活動計画を立てるように要求したのだが、出てきたのは予算案だけであり、全く具体性に欠いていた。この予算案はただ単にBAPPEDA、もしくはJICAに予算の援助を請うための物のようである。隊員が計画案を作成し、食用作物事務所長に手渡したのだが、「俺には作れないと馬鹿にしてんのか」と怒り始め、本隊員は呆れてしまい、その後1ヶ月ほど口をきいていない。

この育苗所建設自体が、今では最大の問題点の気がする。建設当時のチームリーダーの構想に、プロジェクトに対するインドネシア側の評価は「大きな建設物に限られる」と言う考えがあった。インドネシア側の評価を得るためには、1997年完成の灌漑施設に続き、目玉となるような活動(建造物)が必要と考えていたようである。隊員にとっても育苗所があれば、そこを基点として活動できるので望ましくあった。ただ、当初考えていたように業者に頼めば、すぐに出来てしまうだろうと、気安く考えていたのが大きな間違いであった。

今後の課題と解決方法、バル県におけるフォローアップへの提言:

育苗所を有効的に活用していくためには、人的、予算的なバックアップは全く欠かせない。今のところ、正式な職員ではないが、育苗所用に職員が1名、既に隊員と共に活動をしている。出来ることならこの職員を正職員とし、自分の後任隊員のカンターパートにして欲しい。その他、育苗所の臨時職員として現地の村から、2名採用する計画と聞いている。

予算に関してはJICAからの援助が期待できないからには、インドネシア側で調達して貰うほかない。また、当初の約束もJICAは建物を建てるだけで、運営資金はインドネシア側が準備するようにBAPPEDAの了解も貰っている(守られる可能性は低い)。育苗所の運営計画として、食用作物事務所長が自分で予算計画を立てておきながら、何も始まらない前から予算的な援助をJICAに頼んでいる現状は如何ともしがたい。全く、自助努力の気配が見えない。予算がないならそれなりに計画を縮小するなり、内容を変えるなりの変更を行って欲しい。また、予算だけでなく年間何本の苗を生産し、何人が植えて栽培し、誰が栽培指導を行い、肥料や農薬の手配はどうか、収穫後はどういう手順を踏んで販売となるのか、もっと具体的で、目標値(「何アール植えた」ではなく、「5年後に何トンの収穫を得る」と言うような)のはっきりした計画を建てて欲しい。多くの場合、食用作物事務所のプロジェクトは何ヘクタール栽培したで終わってしまっている。そうではなく、そのプロジェクトの影響でどれだけの収穫があり、どれだけの収入増加になったのか、具体的な評価が必要である。

これまでもそうであったが、予算の関係なのか知らないが、突然、芽の出た苗を持ってきて「今すぐ植えろ」というのは止めなさい。もっと計画的に購入、配布、栽培を準備しない限り失敗するのは当然だ。隊員も含めて、実際にやらされる農民、職員がかわいそうである。

他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

土地は借りてでも良いから立地条件の良い場所を選ぶべきである。所有者のない国有地を選んだつもりだったが、後になってひょっこり現れたりする。インドネシアでは土地所有の制度が確立されていないようなので、どこかが国有地であるという確証は得られない。それならば良い条件の土地を借りる方が良い。

この育苗所は当初から食用作物事務所が運営するという前提で建設したのだが、今現在、多くの農民が個人個人で小規模にカカオやクミリの育苗を行っている。各集落で組織化できるなら(不可能に近いと思うが)、小規模な村営の共同育苗場所を設けるのも良いだろう。

事業をやってきた中で言える(直面した)該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響:

バラ集落には泥棒がいる(「盗まれた」と話すと、「上の集落の奴だ」「下の集落の奴だ」と擦り付け合う)。JICAに対する興味も低く、この施設に期待もしていないようだ。灌漑がしっかりしているためか、常に田植えをして、いつも忙しそうである。ガルの農民に言わせるとバラ集落では二期作を行うが、一回当たりの収量は低いという。年間を通してみると同じだろう。

その他: 後任の方は大変です。育苗所に予算が付けば、育苗所の活動は忙しいでしょう。予算が付かなければ、セミナーを開く以外する事はないでしょう。販売するのか、候補地を決めて栽培させるのか、その辺の活動の細かい部分も決まっています。食用作物事務所長の理想とするイメージは高いのですが、現実の活動させられる方の事はあまり考えてないのでご注意ください。

分野: 野菜	事業: 新種野菜展示圃場	投入資金 (Rp. × 1,000)
開始時期: 1999年度後半<8月>		1998: 500
対象集落: パラッカ村チャンミン集落		1999: 800
対象者: チャンミン集落の人々		
実施協力機関: ない。		
<p>目的:</p> <ul style="list-style-type: none"> * 新規野菜の試験的栽培、普及を行う。(家庭菜園向け) * セミナーを開催し、農民の知識技術の向上を図る。 * 近隣農民への情報提供の場とする。 		
方法: 投入と特記点とその意図		
<p>投入:</p> <p>1998年度 肥料、種子購入</p> <p>1999年度 種子購入、栽培</p>	<p>投入についての説明:</p> <p>主な資材は種子、肥料、農薬、支柱など。</p>	
<p>特記点:</p> <p>赴任当初から計画していたのだが、育苗所の難航、気象の悪化などから、1998年度8月に始まったばかりである。</p> <p>一部の種子は日本帰国時に購入し、持ち込んだ。その他は、隊員総会時にボゴールで購入した。</p>	<p>意図:</p> <p>農民の興味を引き、食用となる野菜のパラエティを増やしたい。その為、日本でもあまり見られないような、変わった野菜の種子まで購入した。</p>	
<p>これまでの進捗状況と成果:</p> <p>当初は育苗所完成後に育苗所の敷地内で行う予定であった。しかし、1998年の9月になっても完成の目処が立たないため、プロジェクトのあまり入っていない、チャンミン集落で行うことにした。10月までに資材の準備は出来たが、天候が思わしくないため作業を中止していた。1999年の7月になって、やっと雨も止み始めたため、8月に入ってから作業を始めたばかりである。</p>		
<p>現状、問題点(反省を含む): 1998年度から雨が降り続いたため、栽培を開始できないでいた。もう、プロジェクト終了まで時間がないため、大急ぎで植え付けたい。</p>		
<p>今後の課題と解決方法、バル県におけるフォローアップへの提言:</p> <p>共同家庭菜園、学校菜園をつくり、色々な品種の作物を作ってみれば、生活に彩りをあたえる物が見つかるかも。ただ食べるために作るのではなく、楽しむために作ることも知って欲しい。</p>		
<p>他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:</p> <p>調理方法、味付けなどのバリエーションが増えれば、野菜の消費も増えるかも知れない。</p>		
<p>事業をやってきた中で言える(直面した)該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響:</p> <p>チェンネ集落は日本人慣れしてないためか、シャイでなかなか向こうから近づいてこない。また、サッカーチームが作れないほど、生きの良い若い男が少ないようだ(オヤジはいる)。</p>		
<p>その他: オクラは簡単に出来ます。</p>		